

本興寺だより

令和三年 二月
第二一八号

「衆生の根性欲不同なれば種々に法を説きき。種々に法を説くこと方便力を以てす。四十余年には未だ眞実を顕さず」
（法華経開經）

本年は二月二日が節分、翌三日が立春、一二四年ぶりです。邪気を祓い新たな年に向かう節分。コロナウイルスの鬼が早く退散してほしいものです。

二月十六日は宗祖日蓮聖人の「降誕八百年の正当日」になります。一二二二年（貞応元年）安房小湊（千葉県）に生まれ、清澄寺や比叡山での修学を重ね、「南無妙法蓮華經」に集約される法華經の教えこそがお釈迦様の本懐の教えであることを明らかにされ、生涯多くの迫害に遭いながらも、その布教にまい進されました。

そもそもお釈迦様の説かれたお経（教え）は膨大な数があります。どこが違うのでしょうか？仏様は冒頭の文のように、人々の機根や求めるものが千差万別あり、それに応じて様々な方便を持って教えを説かれたのです。法華經を説く以前の四十余年には本當に説き



教えが「法華經」であり人生を好転できる教えであるのだと。

たった究極の教えは未だ説いていないのだと。

仏様は次のような例えで示されています。如何なる水も、汚れを洗うという点は同じだけれども、谷と川と井戸と池と海の水は、水の相は皆違う。

仏の教えもそのように、人間の迷いや心の汚れを除くという点では、どのお経も功德もあるが、しかし違いもあると云われています。ちょうど人も幼少から大人へと成長するに従って、年齢に応じた知識と智慧の学びと理解の深まりの段階があるように。

ちよつとした迷いや悩みであれば身近な教えで良い。しかし深刻な迷いや苦悩にはもつと深い教えが必要である。その教えが「法華經」であり人生を好転できる教えであるのだと。

世界の宗教で、キリスト教、イスラム教、仏教等、皆自分の教えは絶対唯一であり、他では救われなないというのがほとんどですが、法華經は他の宗教を認め、包み込み、あらゆる宗教は、神仏による魂の救済への道を歩んでいく道程なのだと述べています。

開經偈（無常甚深）の中に「若しは信若しは謗共に仏道を成ず」とあります。法華經の教えを信じる人も逆に謗（そし）り、否定して他の宗教を信じる人も共に神仏の道を成じていけるのだと。

ただ他の教えを含んで頂上に法華經の教えがあるのです。山登りであれば、一合目から二合目と順番に登って頂上に向かいます。途中で他の宗教が自分の教えが頂上（最高）であると思つてそこで立ち止まってしまうから、もつと上に本當の頂上があるのだと、お釈迦様も日蓮聖人も示されているのです。

仏様は「人生は苦である」と説かれています。それ故、まず最初に苦しみを逃れる「四諦」という教えから説かれました。

苦諦―苦しみの実態をじっくり見つめること
集諦―苦しみが起きたその原因を明らかにすること
滅諦―苦を取り除くために心の執着を見つめる
道諦―苦を滅し悟りに至る方法は何か
を示され、己の心を見つめ直せと云われます。

人間の心は大きく分ければ十の心に分けられます。
①地獄界―思いどおりにいかない自身や、苦しみを感ぜさせる周囲に対して感じる怒りや恨みの心
②餓鬼界―満足することがなく、際限のないむさぼりの欲に振り回される心
③畜生界―理性や良心を忘れ、目先の利害に走つてしまう愚かな心
④修羅界―自分と他人を常に比較して常に他人に勝ろうとする慢心の心 この①④の心（四悪趣）が苦しみを引き寄せるのだと云われます。誰でも当てはまる気持ちを持っています。その上にある⑤人間界⑥

仏界までの尊い心を埋没させているのです。

私達は人間として生まれたから人間界にいると信じて疑いませんが、四悪趣の心は人間界ではないのです。

仏様は私達は心が人間界に居ないと云われます。人は皆立派な家に住み、良い車に乗り、電化製品に囲まれて夏も冬もボタン一つで快適な生活を送っています。これ以上何を求め、何が不満なのでしょうかが。

豊かな生活をしていても、心が死んでいたり、荒れたりして苦の真つ只中で迷走しがちな自分がいることに気付かないということです。



日蓮聖人は、「賢きを人といい、はかなきを畜生という」と云われています。善悪を判断し、自己をコントロールでき、足るを知り感謝できる人を人間界に居る人といえます。

トラブルやストレスなどで気が荒れる時は心が人間界に居ないのです。心温まるほつとした人間界の心を持つて生きることは難しいのです。

本年は、辛丑（かのとうし）の年です。丑（牛）は土中であつと春を持つ種子をも意味します。糸に丑で「紐」（ひも）です。先の①④の四悪趣の心を出して無理を押し通せば、紐の如く心が絡（から）まる人生となります。疾病や社会情勢が多く影を落とす中であつても、その変化に対応して耐え忍ぶことが必要な年であります。合掌 本興寺住職 中谷 聰 秀